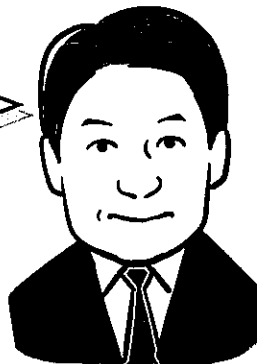


## 体罰問題を考える 4

## 子どもに考えさせ、気づきを引き出すコーチング指導

愛知県刈谷市立かりがね小学校 教諭  
神谷 和宏さん

体罰によらない指導のあり方として、ビジネスやスポーツの世界で用いられる「コーチング」を活用した指導が挙げられます。コーチングを実践する神谷先生に、その具体的手法について解説してもらいました。

## 人間は、痛みを避け快樂を得る

子どもがやる気を出すためには、2つの条件があります。心理学者のフロイトは「人間は、痛みを避け快樂を得る」と言いました。つまり、人はとにかく嫌なこと、面倒なことを避けようとします。そして、楽なこと楽しいことは進んで行動します。特に、子どもはこの傾向が顕著です。

しかし、今でも次のような指導がよく見うけられます。宿題を忘れた子どもに対して、「何を考えているんだ。いい加減にしろ！」と怒鳴る。「宿題を忘れた子は、廊下でやりなさい」と教室から追い出す。「宿題ができるまで、給食は食べさせません」と脅す。「今日は、お母さんに電話します」と恐怖心を煽る。これらの方法は、問題点に焦点を当てていません。さらに、子どもの人間性を否定してしまいがちです。

このように、脅したり恐怖感を与える方法は、確かに一時的に子どもが意欲的になったように見えます。しかし、リスクは計り知れません。「体調不良」「不登校」「引きこもり」「うつ」になったり、さらに「いじめ」や「非行」の要因になることも考えられます。

では、どのようにしたら問題解決になるのでしょうか？

## 質問し、考えさせ、気づきを引き出す

「子どもに考えさせ、気づきを引き出す」ことが重要です。問題点そのものに焦点を当て、解決策を共に考えようと寄り添うことです。考え方、行動などを、教師が一

方的に与えるのではなく、子ども自身に決めさせることです。

教師は、「宿題ができなかった原因はなんだったか一緒に考えてみよう」「明日は忘れないために、何を心がけたらいいのかな？」「先生に協力できることは何かあるかな？」などと質問をします。そして、子どもに考える場を与えます。子ども自身にその原因や解決策を気づかせます。

さらに、その後のフォローも重要です。例えば「昨日はTVを見てしまって、うっかり忘れてしまった」と原因に気づいた子どもに対して、「今日はどうしたらいい？」と質問をします。それに対して「今日は、家に帰ったらすぐに宿題を始める」と解決先を考えました。そして、次の日に「昨日はどうだった？」と質問し評価します。うまくできた内容は承認しほめてあげます。もし、うまくいかなかったり新しい問題点が生まれれば、また質問をして気づきを引き出します。この教師と子どもの間のコミュニケーションの連続が、子どもを意欲的に変化させていくのです。与えられて、やらされる指導では自主性を生みません。自分で気づき、行動を起こすことで、本当の「生きる力」が育ちます。

## PROFILE ● 神谷 和宏 (かみや・かずひろ)

1960年生まれ。愛知教育大学卒業。全国の教育関係機関でスクールコーチングの啓蒙を行っている。『先生のためのコーチングハンドブック』『いじめ・不登校から子どもを救う！教室コーチング』（明治図書）、『教師のほめ方叱り方コーチング』（学陽書房）などがある。